

令和5年度第2回 八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館運営協議会 議事録

日 時 令和6年2月9日(金) 午後1時30分～3時10分

場 所 八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館 研修室

出席委員 岡村道雄会長 高田和徳副会長 山下治子委員 木村和彦委員

出貝幸浩委員 石川宏之委員(オンライン)

事務局 中村館長 松橋副館長 渡参事 小久保副参事 船場主幹

次第

1. 開会
2. 会議

(1)令和6年度事業計画について

事務局：	概要説明
岡村会長：	ありがとうございました、何かこの説明に対して、ご意見等ご質問とかありますか。
木村委員：	来年度の企画展示として3つですか、企画展開催予定だということで、合掌土偶国宝指定から15年という、何かあつという間だなと思って、当時国宝指定で担当していたということもあって、非常に興味深いなと思って、本当に見たいという気持ちがあるのですが、これの情報発信という点でお伺いしたいのですが、4ページに夏季特別展と秋季企画展で周知するため、地元の新聞とかに広告掲載予定だと、ラジオ等もあるのですが、SNSとかそういったもので開催をPRというか、情報発信する予定というのはどうなのでしょう。
事務局：	はい、是川縄文館はSNSアカウントを持っておりませんが、八戸市の一番大きなアカウントのほうに情報共有をお願いして、SNSでの公開というのを今年度から積極的に行うようになっていきますので、次年度も八戸市の公式アカウントから、PRしていただくというふうに考えています。
木村委員：	是川縄文館でSNSアカウントを持つとかという予定はないのですね。
事務局：	今のところ、持っていません。
木村委員：	そうですか。
事務局：	はい、インターネットメディアはホームページに集中して、労力をそこに集中しようかなと考えております。
木村委員：	今、インバウンドということ、前も言ったのかもしれませんが、非常に今青森県がすごく注目されていると。特に台湾、あとは香港あたりから。もちろん台湾とかで、青森のリンゴが売られているということもあって、非常にそちらからのインバウンドというか、まず海外の観光客が来ていると。実際青森市内が中心みたいなのですが、おそらくこれはどんどんまた

	<p>広がってくる可能性もあって、その時にこのやはり合掌土偶って、非常に私はストーリー性もあるし、想像力をかきたてるようなものなので、そういった対インバウンドという意味でも、やはり情報発信というのは、SNSとかそういうのでどんどんやっていくべきだと思いますし、あと実際来られるようになってからの縄文館としてのインバウンド対応というのも、これからやはり考えていかなきゃならないのかなというふうに思っていましたので、その情報発信というのを、どんどんもっといろんな方に、開催をPRできるような手法を是非考えて頂きたいなというふうに思います。</p>
岡村会長：	<p>はい、ありがとうございます。まったく同感なのですが、私も東京で今青森が熱いのだと、今おっしゃったような話で、それとインバウンドも青森が一番熱いようなことが全国放送で流れてきたのですよね。その次にじゃあ何を求めていっているのかと思ったらリングゴでしょう。それから雪だったかな。</p>
木村委員：	<p>うん、そうですね。スキー、ウィンタースポーツですね。</p>
岡村会長：	<p>青森の地域性だとかその歴史だとか風土だとか、そういうのがなんであがらないのかなと強く思いました。これは、青森県がそういう情報発信していないのだなと思って、その間を繋いでいるのが、たぶん旅行会社でしょう。</p> <p>私が去年縄文世界遺産ツアーに二度付き合ってみたのですが、どこの遺跡に行ってもインバウンドというか、ほとんど来てない。</p> <p>これはもうひとえに宣伝が悪い、それからもっと言わせてもらおうと、青森県あるいは東北が縄文の歴史に対する熱い思いがない。縄文の素晴らしさを分かっていないのじゃないかと。</p> <p>それはやっぱり今までの国の歴史教育のまずさですよ、たぶん。私はここでも言ったことあるかもしれないですけど、東京にいて霞が関にいて思ったのは、東北は日本の歴史に貢献したことは一回もないと、そんなところに素晴らしい文化財、世界遺産になるような文化財なんかあるはずはないだろうと、ずっと言われ続けてきたのですけどね。それは、地域の教育とか情報の中で、いやこういうものがあるのだよというのを、もっともっと世界に向けて世界に誇って欲しいのですよね。だからこれはもう世界遺産になったのは、世界に誇れる文化財だから世界遺産になったので、そのことを日本人そのものがあんまり分かっていないのじゃないかという気がします。そういう意味で合掌土偶も、もちろんそういう文化の華だからいいのですが、縄文の優れた美だけでは、やっぱり世界に誇れないと思うのですよ。異文化の優れた工芸品としか見ないので、そのもとには、この東北にいた縄文人の特に女の人たちの思いが、あの土偶に結集しているわけですよね。そういう日本人の心、歴史、そういうものをもってその縄文の歴史がずっと今まで脈々と遠くに一番濃く残っているので、そのこと</p>

	<p>をなぜ誇りにしないのか。まず誇りにして、その次にそういう宣伝をやっ ぱり世界にするべきですよ。それがしていない。さっき言った観光業者と 付き合ってみて思ったのは、世界遺産の縄文のツアーって、今までやった ことあるのと。いやそういう観光のツアーはやってきているけど、縄文と いうキーワードで、やったのは今年が初めてだと。</p> <p>それもたぶん2社ぐらいしかやっていないのじゃないのですか。</p>
高田委員：	うん、1社ですね。大きなところは。
岡村会長：	<p>ということからいうと、これはやっぱりうちに問題があるのではないかと いう気がしますね。これもまた、ついでだから言うけど、高田さんの言 っている、行った先で解説している人たち、あれははっきり言って地元の 解説する人たちが縄文文化の素晴らしさを分かっていない。</p> <p>自分が思っている、自分が関係している遺跡の重要性、誇り、それを誇 りにしてないのですよ。解説する人たちは。これは相当私たちの責任もあ ると思うのですが、シナリオ通りに教科書的に素晴らしさを言っている だけなのですね。だからいろいろまだまだ展開できる要素がいっぱいある と思うので、それに向かって皆で力合わせて本当にやって欲しいですね。 17の世界遺産を持っているところが、それぞれバラバラですよ、今歩いて みたら。</p> <p>隣の遺跡あるいほどこその遺跡よりうちのほうが例えば環状列石4 つもあるのだとか、そんなことを誇りにしてどうするのと。例えばですよ、 実際にそう言った人がいたので、驚きましたね。そうやって比べるものじ ゃないでしょって。すみません、ちょっと話が脱線したのですが、その へんが分かって報道も要するに初めてだとか、なんて言うのだろう、表向 きのその重要性、ブランド名がついた世界遺産になったのだと。世界遺産 になるのに10年もかかって、この10年間ずっとそういう報道だけですよ。 なんでこんな遅くなったかとか。なぜ世界に発信しないのかとか、なん で国内のそういう問題意識がしっかり掘り下げられないのかとか、学校 教育では縄文をどう教えているのとかって、そんなことも含めて、なんか 総合的な何かをまだまだやらなきゃいかんかと、いっぱいありそうな気が します。いかがでしょうか。木村さん。</p>
木村委員：	<p>そうですね。伝えるほうもそういう思い入れがないと駄目なのですよね。 やっぱり見ていると、マニュアル通りやってしまう記者もいるし、そうい うのは主体性が無くなってきている。そうすると、記事としても面白くな いというがあるので、それは言えると思います。</p>
岡村会長：	ぜひ社員教育を含めて、記者教育も含めてよろしくお願いします。
高田委員：	実際問題としてどのぐらいの方が外国人の方が来られたのですかね。
事務局：	実は属性はなかなか把握できていないのが現状でして、令和4年度は年報 にもお示ししているのですが、海外の方はボランティアのガイドでは

	<p>0人です。今年度に入りまして、中国の方が来ているというのは、言葉が違うのでわかるのですが、実数は把握できていないのです。前年度に比べましたら確実に増えているというふうな印象はもっております。</p>
山下委員：	<p>中国語のパンフレットとかはあるのですか。</p>
事務局：	<p>縄文遺跡群は、4カ国語のパンフレットを用意しておりまして、夏の時期とか中国語のものが著しく減る時期とかもありましたので、いらっしゃってはいののだなとわかっています。</p>
高田委員：	<p>確かに、実はコロナになる前ですね、直前の何年かは実は少しずつ増えてきていたのですね。明らかに外国の人が少しずつ来だしたなという、うちの御所野遺跡の場合は、そうなのですけども。コロナとなったら、もちろん途端に来なくなったのだけれども、日本に来られないですから来られなくなったのですけれども、そろそろ回復したかなということで、そろそろまた前のように少しずつ外国の方が来るのかなと思ったら、実は意外と来ない。前のように来ない。確かに日本には結構来ていて、前みたいにまだ京都とか関西のほうには結構多くは来ているようですけども、それ以外にも地方のほうにどんどん最近来はじめたと言っているわりにはこういう縄文遺跡とか博物館にはほとんど来ていないというのが実情じゃないかなという気がするのですよね。確かに今、木村さんが仰ったように、海外向けにとか SNS なんかで発信していく必要があるかなというふうに思います。</p> <p>それと共に、特に中国の方はそうなのだけれども、日本にいる中国の方がいますよね。八戸に在住している方。そういう人たちが来てここを見たりすると、そういう人たちが自分でどんどん出すのですよね。そういうので発信したほうがすごく効果がよくって、そうするとその知り合いの人とかいろんな人が集めて来るようになるので、まず地元の人たちにここに来てもらうようにいろいろ仕掛けていかないと、いきなり海外もいいのだけれども、まず地元の八戸に住んでいる人で海外外国人から来ている方が結構いらっしゃると思うので、そういう人たちにどんどんアピールしてまずここに来てもらうということが、大事なのかなというふうには気はしていました。</p> <p>実はうちの博物館の NPO の関係で、3月で NPO も終わりなのだけれども、実は中国人の中国から来た方1人を職員として採用していたのですよ。そういう意図があって、確かに彼女もそうすると、縄文を知っている人にどんどん中国の人に直接連絡したり案内したりして、そういう SNS なんかで流し込んでいたりしていましたので、確かにそういうのもこれから考えていかなければいけないのかなという気がいたします。</p>
岡村会長：	<p>先ほど、事務局から、若干そういう説明があったけど、具体的な数字がここに出ているのだよね、入館者数。これを見ると令和3年に世界遺産登</p>

	録になって、それ3年、4年は、どうなったのかなというのと、いずれにしろだけど、5年の計が30,295人。減ってはいないのだけど、少しずつ増えているのだよね。確か。そう言っていたよね。
事務局：	はい。
岡村会長：	あんまり世界遺産と連動していないのかなという気もするのだけど、今、高田さんの話とか。それから、私が、鹿角市の大湯環状列石の話を書いたら、令和2年まで、1万3千だったやつは、登録の年に3万に増えて、そして令和4年も3万で。そして今年はもう確実に下がっていると、そう言っているのですよね。これ、巷でよく言うのですが、3年ルールというのがあるらしくて、文化庁の世界遺産担当の調査官が3年ですよと、みんなの前で公言していましたね。大体、今までの世界遺産の入り込み数を見ると効果は3年なのだそうです。例えば、富岡の製糸場。それから、石見銀山だとか、もう駐車場が出来て、店がいっぱい出来て、3年間くらいは、どうしようもない、むしろ、その観光公害というのになっているとですかね、そういうことは言われかけている、大体そのくらいで、ピークを迎えると、ガタガタガタとかって、どうも大湯の数字を見たり、それから三内丸山の状況なんか聞くと、どうもそういう傾向が強いと。ぜひこの辺は、世界遺産関係している人たちに調べてほしいですね。要するに、何事も行政やってやってしまうと、影響効果みたいなフォローアップはしないのですが、これは世界遺産、縄文世界遺産はぜひ地域のためにでも、そういう数字をしっかりとって、共存共有をどうやったら出来るのかとか。情報共有だってそうですよ、あるところだけが、発信してもダメなので、トータルでやろうっていうのがこの世界遺産とのひとつ大きな要だったと、私は思うのですが。ついでながら言うと、私は中国の世界遺産とか見て回った時には、どこに行っても、すぐ世界遺産と標識が出たりしているのですが、今回、東北を周って見て、玄関というか、これは世界遺産だなというのがわかる標識がないのですよね。ああいうのもなんかチームで、なんかこの地域の縄文文化を高めていこうという熱意が感じられないので、その辺、ぜひ共有してほしいなど。みんなだから、少なくとも東北の人たちは縄文をキーワードにみんな連携しましょうよ。
事務局：	補足ですが、昨年8月に縄文遺跡群全ての構成資産で来訪者動向調査という、アンケート調査を行ってしまして、今、事務局で全体を取り纏めて集計をしているところです。 満足度等々は把握するように、もうすでに動き出しておりますので、結果が公表されるまで、もうしばらくお待ちください。
岡村会長：	そういった時に、今日も言っていた、インバウンドがどのくらい占めるかとか、そういう属性もぜひ。
事務局：	恐らく、そのアンケートを直接書いてもらうのですが、外国の方々に話か

	<p>けていないのではないかなと。元々の設定がインバウンド調査ではありませんので、そこには、ちょっとお答え出来ないかと思います。</p>
岡村会長：	<p>インバウンドも調査できればぜひ。</p>
石川委員：	<p>先程の内容と重複するかもしれないのですが、2点お聞きしたいのですが、令和5年度の夏季特別展が前年度から比べると、よく見れば8月の来場者数が増えているということで、これの属性というのですか、県内県外在住とか、あと男女比とか主な年齢層とかそういったものがもし分かれば教えて下さいというのが1点目と、あと前年度よりも今年度のほうが増加しているという意味では、ある意味コロナが5類になったということで、結構他の県外からの観光者が増えてきているのかなというの期待しているのですが、たとえば教育旅行団体が増えたとか、今YouTubeを見たら1年前ですかね、市川さんがなにか教育プログラム用の事前学習用のビデオが上がっているのを見て、こういったものも何か、それこそ是川縄文館のホームページとリンクかけてやるといいのかななんて思ったのですが、世界遺産になったことによって、そういう教育旅行団体が増えてきたとか、そういった実感とかデータとかあるのでしょうか。</p>
事務局：	<p>令和5年度は修学旅行などの教育旅行は0件となっております。（*後日再点検し、1件あることがわかった。）</p> <p>令和2年度ですか。コロナ禍の真っ只中は県内中心に教育旅行利用が増えたのですが、コロナ明けは、また元の状況というか、なかなか修学旅行、教育旅行として、遺跡や博物館というのがなかなか選ばれない状況にはなっています。</p> <p>令和5年度にアンケートを取っていますが、男女は属性として追わないことにしていますが、県外の方がたくさん来られているというのはアンケートからは読み取れていまして、1番多いのは60代、次に70代、そして小中学生というような年齢層が是川縄文館にはたくさん来ていただいているということ把握しています。以上です。</p>
石川委員：	<p>どうもありがとうございました。</p>
山下委員：	<p>別件なのですが、八戸縄文保存協会と連携した活動について、ミュージアムショップと喫茶コーナーなどがあって、喫茶コーナーではカレーがなくなったと書いてあり、また新しいメニューの画像、写真があったのでわかりやすくなったなと思いました。確かにカレーの匂いが上にまできていたので、本当になくしたのは良かったのかなと思いました。いろいろメニューの工夫もあったので、でもお安いなと思いました。この辺はどうかかなと、もちろん安くて美味しいことには、全然文句言う人はいないと思うのですが、結構安いのだなという感じがして、それでうまく成り立っているのかなと、材料費とか人件費はあんまりないかもしれないのですが、その辺はそれでよいのかどうかというのは、皆さんとお話しをして</p>

	<p>もいいのかと思いました。安いというのはいいとは思うのですが。</p> <p>それから、ミュージアムショップもたくさんいろんな商品が、新しい商品が出ていて思ったのですが、いろんな学校さんとかいろいろ作っているグループの方との協力というのはわかったのは、そういうお店の成り立ちなのだなというのはわかるのですが、こぎん刺しみたいなグッズが色々あって、そのグループによって完成度もそれぞれだと思うのですが、値段帯が意外に買いやすい金額、1000円以下のものもあり、コースターがあって、作りは丁寧だと思うのですが1枚1300円くらいする感じで、これはどうかなという値段帯とかそういう値段構成とかについても他の商品との兼ね合いも検討はいるのかなと。</p> <p>それともう1つ、この前NHKでやっている「美の壺」というのがEテレでやっているのですが、その時に青森県の手仕事というテーマで、こぎん刺しとか津軽塗りとか、あと青森硝子というのとかいろいろ紹介していたのですが、ああいうように青森県として、手仕事がとても盛んで上手でというか器用で、丁寧でみたいなどころとそのグッズ、こぎん刺し系のものもいっぱいあるし、漆もあるので、縄文館だからというところもあるのですが、もう一歩、それを作り出す青森県の風土とか土壌というのですかね。その手仕事に対するひたむきさみたいなとか、そういうのもこの縄文の文化とすごく混ざりあってきているんだみたいどころがショップのどこかで、ポップでもいいと思うのですが、そういうものも打ち出していけたら、ああなるほどと、今に生きる八戸の縄文文化なんだみたいな、よくわからないけど、ああ生きているのだというのが他の県から来られていたり、他の国から来られたりすると、その特徴がすごく納得できる特徴なのではないかなというふうに思ったので、その面もショップとして打ち出せたらよいのかなと思いました。</p> <p>すいません。あと、もう1つですけど、来年度の縄文の編み/組みの探究(仮)とかあります。</p> <p>この辺も手作業、手仕事の話だと思うのですが、難しい単語がたくさんあるので、私は編みと組みがあるので、アミというのとクミというのがいたら、アミとクミで色んなストーリーができていく、キャラでもいいし、普通に考えるとあみちゃんとかみちゃんなんかわからないですけども、そういう、今日もポスターに雪だるまの「いのるん」がありましたけども、ああいう感じで取っつきやすいところも工夫されてはいかがかなと思いました。以上です。</p>
高田委員：	<p>先程の入込数とか何かの関係なのですがけれども、是川の博物館は博物館で見るものいっぱいあるからあれなのですがけれども、意外と4年だとか5年だとかの入館者数とかなんかを見ていても、そんなに減っていない。むしろ増えているというのは恐らくここだけだと思うのですよ。先ほど岡村さ</p>

	<p>んもおっしゃったように、他に世界遺産になったところは、令和5年から軒並みに減っています。これから特に来年度なんかはもっと減ると思いますけれども、意外と是川のここの縄文館というのは、意外と世界遺産にあまり関係がないお客さんがじわじわと来ている様な気がいたします。だって今でも、遺跡の整備でほとんど遺跡は見れないのですから。遺跡を見るところ、正直に言って何処もないのに、結構お客さんが増えるということは、やはりそれだけの魅力があるからなのですよ。ただ逆に言えば、その自信を持って、今度遺跡のほうがどんどん整備されて行って整ってきたら、結構いろんな人が逆に来てくれるようなことになると思うので、やはり大体の流れを見据えていって、データの計画とか出来るようにしたいのじゃないのですかね。ずっと見ていると、やっぱり他は、本当に軒並みに減っていますので、それだけ魅力があるのだと思います。</p>
岡村会長：	<p>一体魅力は何なのだとすることを、もう少ししっかりおさえて考えてほしいですね。高田さんのところ（御所野縄文博物館）だって、落ちないよ、多分。他は落ちているけど、ここは落ちないと思う。その前からどんどん増えていって、大抵ずっと維持しているのだよね。そこでやはりしっかり考えなきゃダメだと思う。世界遺産効果は何があったのという行政効果として、行政効果をしっかりいろいろなバロメータで押さえておく必要があると私は思うのだけれども。高田さんのところは多分落ちないよ。</p>
高田委員：	<p>そうですかね。</p>
岡村会長：	<p>理由は今は言わないけど。八戸も一定程度落ちない。むしろ上がっていくと思う。それを他の世界遺産で言えば、あれですよ。昔から有名なグスクなんて効果が若干ありましたよ。年間数万人増えて元に戻ったけれども、相変わらずその前の30万だか40万かな、それを維持しています。そういう自力のあるところ、その自力は一体何なのだとこのをしっかりと一回おさらいして、その路線で頑張っていってほしい。高田さんのところ、多分そうなると思いますけれど。世界遺産にあれだけお金を使って、あれだけ行政が努力したのに、一体その行政努力は何だったのだとこのを、どこかからか評価されているのじゃないのですかね。それが怖いですが、税金を使ってやったのだから。</p> <p>どうしたらいいのですか、高田さん。</p>
高田委員：	<p>いや、やっぱり会長がおっしゃるように魅力をつくれないといけないのじゃないでしょうか。</p>
岡村会長：	<p>そうなのだよね。魅力が上滑りなのだよね。だから、いやなの。大谷君の名前を借りなきゃいけないとか、合掌土偶に名前を借りなきゃいけないとか、合掌土偶は世界遺産じゃないのだから。国宝ではあるけど世界遺産じゃないのですよ、あれは。</p>
高田委員：	<p>では、別なことをちょっと。</p>

	<p>埋蔵文化財の発掘の業務と、ここの兼ね合いになるのですが、ここは埋蔵文化財センターですから発掘は主で、多分それに基づいて対応して調査をして、整理・活用して、それを発信して、あるいは皆さんに見ていただくということが、館の基本的なスタンスだと思うのですが、どうなのでしょうね。その発掘の件数とか何かというのは、最近増えているのですか。それとも、ほぼ同じとか、あるいはかなり減ってきたとか、そういうことはどうなのでしょう。まず最初にそれをちょっとお聞きしたい。</p>
事務局：	<p>発掘件数につきましては、年間 40 件程度で近年推移しておりまして、ただ今年度に関しましては、件数は減っています。20 件程度になっていますけれども、一時的なものだと思いますので、件数は変わらず 3、40 件はある。今後も続くのではないかと考えています。</p>
高田委員：	<p>その場合、その調査する調査員の方はどうなのでしょうかね。足りているとか、本当は足りないとか、大変だとか。</p>
事務局：	<p>発掘調査の職員につきましては、現場に出る職員が現在 4 名おりまして、職員数は、今は何とかまかなっている状態です。近年、松ヶ崎遺跡ですとか大規模な調査が多かったですので、そちらのほうに職員が現場シーズン、4 月から 12 月ぐらいまで、ずっと張り付くというような状況でして、そのほかの個人住宅、小規模な発掘につきましても、ほかの職員が対応している状況でして、トントンの状態というような感じでやっています。</p> <p>数年前は発掘経験が少ない職員が多かったのですが、段々経験も積んできていますので、少しずつやれるようになってきているかなと思います。</p>
高田委員：	<p>他のほうでは、発掘の件数がほとんど、どんどん減ってきているのですよ。調査をするところがなくなった、調査の件数が無くなってきているというか、それで調査員はいるのだけれども、実際もちろん確認調査とかそういうのはあるのだけれども、そういう面では、全体的に情報があまり最近出てくる、ないしね、非常に全体がなんか落ち込んだような、ここだけじゃなくて、ここはそうでもなくて、逆にある意味ありますけど、はい。</p> <p>それとこの場合は、発掘現場をやる人と、遺跡の整備の担当で、整備のことをやっている方もいるし、後はこれ以外の博物館的な活動のやつもここでやると、考えてみると非常に大変なことだと思うのだけれども、それがもし例えば、発掘の部分がある時ボーンと増えたりすると、逆にバランスが崩れますよね。そうすると整備のほうも大変になってくる、誰も対応できないとか、あるいは博物館の運営のほうにも影響を与えるとかようなことがあると思うので、それでどうなのか。一気に発掘件数が増えたりすることが、これからあまりないのかもしれないけど、もしあったら大変ですね。バランスが崩れてしまいますよね。まだ八戸市さんの場合は、</p>

	職員も結構どんどん採用したりとかしているから、ある程度職員のキャパがあるので、大丈夫なのかと思うのだけれども、でも一回バランスが崩れた時に、どう対応出来るのかというなんか心配なところではあります。
事務局：	大規模な発掘調査が出てくる時は、前年度ですとか前々年度とかに情報を出来るだけ把握しまして、すぐにいつ調査したらいいかというようなところを事業者と相談しながら、あまり単年度に巨大な発掘にならないようにとかというところは、調整しながらやってきていまして、今後も調整しながらやって、他の整備ですとか展示のほうに大きな影響が出ないように、うまくやっていきたいなと思っております。
高田委員：	皆さんが一生懸命やられたり、それにしても事業がすごく多いですからね。年の企画展を3回もやるわけですから。そのやり方とか、発掘もやっているし整備もやっているし。本当手一杯なのかなというような感じはしないでもないですけども、でも上手くこなしているような感じなのですけども。やはりバランスが崩れた時に大変だなということ。
岡村会長：	必要だけど、展示の専任と現場発掘専任と、一応分けてやってはいるのでしよう。 だから今の問題は、そういう中で博物館業務とそれから発掘業務とか、そういうのを事前に勘案して協議しながら人の配置ものフレキシブルにやって、それをずっとここは頑張ってきているところなので。
高田委員：	ここだから出来るのですよ。人数もいるしね。
岡村会長：	うん。頑張ってきてくれているのじゃないかなと私は思っているのだけど。気になるのは金の問題なのですけど、補助事業でやっているやつと原因者負担でやっているやつと、八戸城はどっちですか。
事務局：	八戸城は、公共工事です。原因者負担でやっています。
岡村会長：	負担だよ。国庫補助は要するに、文化財の国庫補助は確認調査とか。個人住宅とか、そういう補助事業に相当するやつだよ。 今文化庁の発掘補充事業が予算がもう本当に下がってきて、要望の半分満たしていないというそういう経済事情と、それからもう一つ気になるのは、例えばあんまりこういうこと言っちゃいけないかわかんないけど。別に批判して言っているのではなくて、原因者を待たせているわけでしょう。
事務局：	はい。
岡村会長：	うん。そういうやっぱり調整のなかに金を出してくれる人と、期間と事業をうまく調和してやらないと、どうもこうもない話になりかねないし、私はそういう事件にいっぱい巻き込まれて生きてきたので、すごく気になるのですよ。何であんな時間かかるの。はっきり言って。
高田委員：	それは調査にということですか。
岡村会長：	つまり長芋事業を待たせているわけですよ。今答える必要はありません。

	<p>答える必要はないのだけど、そういう関係性の中で微妙に塩梅しながら調査してきたのだと思うのだけど、要するに私なんかいつでも事業者側に立って考える癖がついていて、これ以上事業者に負担を掛けたら弾けるぞという場面がいっぱい経験してきたので、ぜひその辺のところを注意してくださいと思います。</p>
事務局：	<p>はい。ありがとうございます。</p>
岡村会長：	<p>補助事業もなんとかならないのかね。どんどん目減りして行って、財務省と喋る時に原因はやはり零細企業が火を吹かないように農家があれしないように、ぜひこういう物は認めてくださいってずっと折衝になると、やはり何て言ったらいいかね。一応はそういう負担も受任するという事で原則は認められてはいるのだけど、受任できる範囲を超えちゃまずいのですよ。そこのところだけは緊張感をもって行ってほしいなというのは思います。</p> <p>それでその補助金をなんとか確保してきたのだけど、どうしようもない場合、国庫負担してきたわけじゃないですか。どうしようもないところは半分に減っているのですよ、今。それがものすごい私は恐ろしいことだと思う。また、何で全部掘らなきゃいけないのって話になるのですよ、きっと。全面調査なんかしなくていいですよって。アメリカみたいに4分の1を掘って、統計的に遺跡を推計すればいいので、全部掘る必要ないって、ずっと言われ続けてきた身としては、あるいは出土遺物なんかも、何で全部保存しておかなきゃいけないの。半分くらい捨てたらいいじゃない。どうせ当時のゴミでしょみたいなこと言われ続けてきた身としては、なぜ、そういうものを手当しなきゃいけないのか、なぜ残さないといけないのかという緊張感はぜひ持ってほしいですね。埋蔵文化財センターは特に。すいません。なんか嫌な話をしちゃいましたが。</p>
出貝委員：	<p>地元の学校からということで、いわゆる教育普及に書いてあるところの学芸員による講座や体験学習について、実際に市内の小中学校で、ここに来て体験だとか講座を受けるのと、出前としてというのは、比率で変わってきたのがみられる感じですか。例えば、こっちに来て体験とか受けるのよりも、出前で来てくれというのが増えているとか、そんな傾向というのはどうでしょうか。</p>
事務局：	<p>是川縄文館は来館しての見学と体験をセットで行う学校が多くて、出前は年に数校、1校、2校というので、明らかにこちらに来ての体験というのが多い傾向があります。</p>
出貝委員：	<p>であるのであれば、マイナスな話になっていくのですが、実は学校現場は来年度、今いろんな計画を立てている中で大変なことが起きています。</p> <p>一つは先生方の働き方改革です。ということで、余剰時数ですね。1年間に国で決められた時間数を、各学校というのは、結構多くの余剰時数を</p>

	<p>とっていたのです。その余剰時数のおかげで、どっかに行って一日授業潰しても行けるだとか、そういう遠足だとかみたいなのをやっていたのですが、国の文科大臣が働き過ぎだと、時数を取りすぎだということを言ったがために、来年度かなり各学校、時数を減らしています。ということは、まずそこに行くだけの余裕の時間が生まれなくなっているということ。それから、2024年の運送業の問題によって、多分これからバス代がどんどん上がっていくだろうということ。八戸市ははっふる隊なのですが、はっふる隊については各学校でも決められている。これに使うと決めているので、そこで増えることはないということを考えていくと、中々学校としてこの施設に来て、いろんなことをするというのは出来づらい要因が増えてきているのは確かです。うちの城北小学校も出前で来てもらったかな。出前で勾玉づくりをしているのですけれども。要は、そういうところで各学校と繋がりをこれからもっと、リモート授業も含めながら考えていったほうがいいのかないかなという感じがするので、そこは思っただければと思います。</p>
<p>岡村会長：</p>	<p>ここだけで考えてどうなる話でもないのですが、学校教育との連携、私も学校に行って相当厳しい状況だと思う。それは労働条件のことばかり言っているけど、それから教員のやる気を利用しなきゃ駄目だとか、そんな精神論ばかり言っているけど、なんか議論するところが違うのじゃないかという気が本当にしますね。だけど文科省がああいうふうに言うから、建前としては人と人の繋がりと地域との連携だとか、そんな話ばかりしていますよね、校長さんたち。</p> <p>私も隣の学区の小学校の管理運営委員というのを3年いって、毎月お付き合いしているのですが、地域とこの学校と文科省、教育委員会との軸がどうも上手く入っていないなという感じがしょっちゅうですね。</p> <p>すみません。根本的なことを言って恐縮ですけど、そういう出前授業だとか体験だとかをやり始めたのが1990年代くらいかな。盛んにこの地域では初めての体験学習だとか、それから出前授業だとか、そういうことを随分とマスコミも取り上げて一時のブームだったのですね。それは、私たちがやっていることを出来るだけ世間に広めたいし、学校教育というのもわかってほしいと。学校との連携というのも盛んに言われたのだけど、今そういう話し合いだってあまりしてないのじゃないですか。教科教育なんかのグループに呼ばれて、私はよく、私たちの成果と学校との連携みたいな話は、よく教科書を例に出して、この教科書は正しいことを伝えているのか、新しい成果を取り込んでいるのかみたいな話し合いをよくしましたけどね。今そういうのはあるのですかね。</p>
<p>出貝委員：</p>	<p>私は、経験ないですね。</p>
<p>岡村会長：</p>	<p>ぜひそういうことをやってほしいような、教科研究会みたいなのはあるで</p>

	しょう。
出貝委員：	あります。
岡村会長：	そういうところに、今みたいな色々なジャンルの理科教育だったら、自然とのあれだとか、そんなの研究者と学校教育をどう結びつけていくのか、子どもたちをどう結びつけていくかみたいな話を、学校は本当余裕ないと思うのですが、私なんか見ていると、日々の課題を、精一杯時間を超えて対応しているというのは、確かな気がするんですけどね。
山下委員：	いいですか、すみません。私は縄文の編み組みを、そこからまた気になって申し訳ないのですが、ターゲットはかご好き、縄文好き、植物好きとあったのですが、ここの併催行事のところとか、現代に行ってみてというところでも、かご編みというのが出てくるのですが、この組みというところがあまり、組みだと組み紐みたいな、どういうふうに行っていたのかわからないんですけど、組むというのと編むというがテーマになっていると思うのですが、ここは、かごは編み、編みかごというイメージなのですかね、あれを組むのか編むのか。
事務局：	両方ですね。底辺は組んでいまして、そこから立ち上がっていくと編みに入っていく。ですから編み組みという、編組技法というふうな名前になっております。
山下委員：	この底面は組みで、上に立ち上がっていくと、編みになるということですか。
事務局：	編みを使うものがあるので、総合的に編組製品とか編み組み技術なので、編み／組みというふうな、仮題としております。
山下委員：	それはかごというか、例えば縄じゃないけど、何か植物でそれを組んでいるというか、現代みたいな植物をくるくるとやってみるとか、そういうものありますか。
事務局：	かごの素材は大きくやっばりササ・タケ類かあるいはイタヤカエデなどのへぎ材を素材として、編み組みをしていきますので、ぶどうの蔓のかごとかもありますけれども、縄文のかごも大きく二系統があるようなのですが、是川の物はどうやらササ・タケ類が多いようです。
山下委員：	竹を細く切った。
事務局：	そうですね、しかも孟宗竹（もうそうちく）のような太い物ではなくて、この辺に生えているのは、アズマネザサとかスズタケといったそれこそ一戸町の特産ですけれども、そういった物を素材にしていることが、今共同研究で素材が分かってきましたので、まさに一戸の鳥越のカゴ細工の方にもご協力頂きながら、再度復元をしたいと、そういった研究テーマをコンセプトとしては、雑貨屋さんのような雰囲気がかご好きの方ということで伝え方は優しくする、ただ中身は最新の研究成果を出していこうというふうなことで、これを研究として、今まとめていくところとなっております。

山下委員：	<p>こういう手仕事のとか、編み物とか組み物とか、こういうものを好きな人はたくさんいるので、今まで来たことのなかった人と呼ば込むにはすごくいいと思うのですよね。夏にやるのでなんですけども、別な時にうちで編み物のワークショップをやったのです。ワークショップというけど、みんな例えばモチーフを編んでそれをつなげるみたいな、最終的にはつなげる。だけどみんなこれくらいの編み物をするのですよ。今若い人は、小さい子もあまり編み物をやらないのですけれども、ある程度年齢がいくと、大体みんなできるんですね。すごく中には得意な人もいて、その人が教えたり何かしていると、編み物をしながらすごくコミュニケーションができるのですよ。手は単純に動かしているだけなのですけど、しゃべることは動かしながら何でもいろいろしゃべったりできるので、そうすると、何か知らない楽しい空間ができるのですね。何かかごでもきつとやっているうちに、新しい技術とか、この色をこうやったら見えるとか、そんなの教えてもらえるのもあると、新しいコミュニケーションというか、かご仲間というか、そういうのが出来ていくのじゃないかなと思いました。以上です。</p>
事務局：	はい、ありがとうございます。
岡村会長：	<p>新しい分野だから。用語も、こういう用語で元々いいのかどうかと前々から私は疑問ですけどね。もっと普通の人聞いてわかるものの名称でいいのじゃないのですかね。編みだとか、組みだとか。そういうのも大事だけど、日常使いのザルなんかは縄文時代からずっとあって、それは容易でベーシックな生活の一部だったのだと。そういうことを私は是非伝えてほしいのですね。そういう点で、確かに学問的には編み組みでしょうけど、編み組み製品と言ってわかる人ってどれだけいますかね。それは、それに打ち込んでいる人はわかるかもしれないけど。どうなのですかね、高田さん。そういうことはあまり気にならないのですか。</p>
高田委員：	<p>確かに言葉としては、そのとおりなのですよね。ただ、その編み方によって、編みと、それからそうじゃなくて、ただ絡めたりとかなんか。</p> <p>色々あるからあれなのだけれども。でも、これからどんどんどんどん広まっていくような気がしますよね。ようやく地域によってどういう素材を使っているかとか、ああいうものは更に加工するというのは、実はすごく大変なのですよ。その辺りの山から取ってきて、それをただただ絡めているというのをやっている人がいるけども、それをそうじゃなくて本当にちゃんとしたのを作るためには加工がすごく大変で。</p>
山下委員：	何か蒸したり、いろんなことするのですか。
高田委員：	<p>うん、したりする場合もあるしね。だから、そういうのを魅力みたいなやつを、どんどんいろんな人にわかってもらえるようにやったほうがいいと思いますよね。</p> <p>その人は待ってはくれない、やりたいことがいっぱいあるから、そうい</p>

	<p>うふうなのでどんどん入っていっちゃって、細かく細かく分けたりいろんなことをやっちゃうのだけれども、それよりもなんかああいうふうなことをおっしゃったように、何か作ることが楽しみみたいな、そういうふうなことがいろいろな若い人たちに伝われば、むしろそっちのほうがいいのかなって思ったりしますよね。</p> <p>もう縄文土器と同じくらいの編みかごを作っていたのじゃないかと言われるくらいだから。カゴだとあれは残らないからね。たまたま貴重なものにしかならないのだけれど、実際土器を作るのと同じくらいの量のカゴを作ったりなんだと言われていていますので。</p>
岡村会長：	<p>何かその辺のところをもっと身近に、何ていうかな。人々の生活に引き寄せて、歴史として語るということが、私は一般の人たちに理解をしてもらえないのじゃないかという気がするのですよ。編みもの好きの人はどうやって編むかとか、みんなで編んだら楽しいとか、そういうのも一つの結果だけど、今のお話のように、土器よりもあるもの、編組製品とかね。もっと数量的に多かったかもしれないとか、そういうことも含めて、そういう歴史が大事なのだと私は思いますよね。中世で漆器なんかあんまり出てないように感じるけど、土器より多いのですよ、明らかに。これは記録的に。その辺はくどいようだけど、歴史とそれから日常生活にどう受け入れられてきたのかという。そして、そういう伝統が現代まで繋がってきていることの重要性みたいなものは、私は気になります。</p> <p>頑張ってください。そういうことも含めて、是非展示してほしいと思います。そういう点では、この石器・石製品というのも今まであまり扱ったことないとは思っただけで、石器・石製品とはどういう切り口ですか。</p>
事務局：	<p>はい。まだ詳細は詰めてはいない段階とは思いますが、館蔵品の是川の製品の紹介という程度の企画しか定まってない状況です。</p>
岡村会長：	<p>縄文文化の中で石器の占めるステータスって非常に低いので、全然研究が進んでないと言っていいくらいなのですけど、一番重要なのは実は利器なのですよ。鉄が出てくる前の。石器の実態というのは、ほとんどわかってないです。そこまでいきなり展示してくれとは言いませんけど、味付けしてほしいね。</p>
事務局：	<p>ありがとうございます。</p>
岡村会長：	<p>それから、山下さん、さっきそのショップだとか食堂の話みたいな出ていたけど、私の捉え方から言うと、そういうミュージアムなんかレストランがついたりとか、国立博物館とかみんなあるようだけど、県立でも試みたけどなかなか維持できないとか、そういう長い歴史とかなんかから見て今後はどうすることができるのですか。あるいは実態として私はよく言うのですけど、市のこういう博物館とかで、こういうショップはともかく、喫茶とか軽食を出しているところってほとんどないじゃないですか。その</p>

	<p>辺の実態は捉えていますか。ちょっと質問形式で悪いけど。</p>
<p>山下委員：</p>	<p>飲食施設が日本のミュージアムとか美術館とか博物館で飲食施設がすごく注目されるようになったのは、一番インパクト与えたのが、おそらく世田谷区立美術館のレストランだと思うのですね。そこは最初 1986 年にオープンしたのですが、美術館の棟とは別にしてレストランで本格的なフランス料理を作ったのです。そこはやってくれるところを募集して、それなりのホテルでサービスをやってきた人とか、かなり真剣に考えて作ったので、ある程度成功して今もやっていますが、第 3 セクターで作ったのかな、その中の一部の事業がレストランですね。そのあたりから海外の情報もたくさん入ってくるようになったので、なんで日本の博物館はお堅いばかりで飲食施設が食堂みたいな、食わしてやるぞみたいなところが多いのだろうかというふうになっています。以前に東博の新聞で見たときにそのコラムに職員の学芸員の人なのですが、やっとなら本格的なミュージアムショップができた。次は飲食施設だと。なにしろその時まではおわかりかもしれませんが、90 年代ちょっと 90 年代半ばぐらいのお話だと思うのですが、本当に食券を買って職員の人と来館者が同じところで食べていて、本当に給食ではないですけど、今まで素敵な作品とか物や資料を見てきたのにいきなり現実に引き戻される落差ってなんなのだろうというのはみんな気が付いていたのですよね。だからそういうことで飲食施設をどのように行ったら良いのかというのがあったのですが、やはり今までやったことのないことです。まず建築設計の中でもどこに置いたら良いのか、匂いはどうするのかということも、ここもありましたけれども、それから虫が来たらどうするのかということも、かなり色々試行錯誤していきながら。</p> <p>それともう一つは立地ですね。一時期は景色が良いからっていうので山の上の方に作っていたりとか、文教施設をここの地域に呼び込もうと言って、ちょっとアクセスの悪いところに作った、でも景色は凄く良い。ここでレストランをやったらもう凄く良いぞって感じだったのです。いやでも作る方、運営する方からすると、集客はどうするのだ。5 時で終わってしまっている。5 時からお酒飲んで、やっぱりそこで儲けがいっぱい出来るのに、ランチは安いでしょってランチに来て、それでせっかく色々な料理をお出ししようと思ったときに終わりになるとか、色々な仕組み的なものも変えていき、それでその場所で、今結構多いのは繁華街に作っていますよね。繁華街というか、いろんな市でも、ずっと離れたところにあんまり作らないで、アクセスのし易いところに美術館、博物館が出来ています。そうすると集客が、飲食施設だけでも集客がまあまあいけるだろう。博物館の展示や美術館の展示は毎日見なくても、食事は毎日するかもしれない。というようなことで、それか閉店時間と、閉館時間と閉店時間をず</p>

	<p>らすというものです。それから思い切ってここみたいにあんまり大したものを出さないで、軽食なのだけど何か地域性のあるもの、そのように工夫して出すとか。そういうふうに変ってきているので、やはり立地と、あとメニュー構成、それと営業時間、集客。いくら落としてくれるのかというようなこと、色んなことを考えながら、変わってきていると思います。</p>
岡村会長：	<p>ありがとうございます。うん、そういうことなのだろうねえ。世田谷は86年。それから国立博物館にレストランがついたりしたのが90年代ぐらい。</p>
山下委員：	<p>そうです。90年の半ばくらいだったと思います。（東京国立博物館の）法隆寺館ができたところ。</p>
岡村会長：	<p>私が質問したのがこういう考古系の博物館とかでいくつかそういう試みをしたけど今やっているところほとんどないのじゃないってことです。</p> <p>それはどうしてなのってちょっと聞きたかったのです。確かに品選びだとか施設だとかスタッフだとか場所性だとか。確かに地域の食と共有するとか、展示を見なくてもここに来て入館料払わなくてもちゃんと食べられるし安くて地域の物が食べられて、手軽に入れる場所というふうな選択が必ずしも起こっていないというか。</p> <p>実態として、どうしてこんなに少なくして一度やったやつも経営がなかなか難しく辞めになるってあたりはどこにどうしたらいいかなという。</p>
山下委員：	<p>やっぱり一つは集客だと思います。それとあとは規模、そんなに大きなスペースがとれないということもはじめに考えているし、それから厨房をどうやって作るかってのもまた別な問題なので、考古の場合はちょっとそういうのあるのです。ただ一回一つの工夫としてはお弁当を予約するっていうのがあるのですよね。大阪の八尾市のしおんじやま学習館とかは。</p>
岡村会長：	<p>うん。高田さんのところでもやっていたのだけど、今どうなっている。</p>
高田委員：	<p>うちはやってないですね今。</p>
山下委員：	<p>事前に予約をとる。もしそこで、ただ普通のお弁当じゃなくて地域の料亭っていうのかな、仕出しみたいな所があって、そこと一緒にメニューを考えてもつとご飯の形を古墳の形にしようとか、色んなことをやってその代わり1日15組まで予約制というようなことをすると、はじめ、あそこにわざわざ行こうと思う人はそういうやり方で対応するとか。</p> <p>あとは、別な所は、景色のいいところに椅子かそれなりの椅子とテーブルをきっちり作ってあとは大きな自販機でそこでゆっくり休んでください。そうすると人件費もいらぬし、もっと食べたい人は外に行ってくださいという感じなのですけどそういうやり方をしている所もありました。</p>
岡村会長：	<p>高田さんところはどれもみんな試みたけど、どう、あんまりやってないよね、今ね。</p>
高田委員：	<p>弁当は結構やったのだけでも、中々ね。みんな地元のなんか自分のうちで</p>

	<p>ちょっとやっているくらいの人達だから、段々にそれに対応出来なくなったりとかですね。そういうこともあって。</p>
岡村会長：	<p>私としては、山下さんが言うように色々な地域の人が入ってきたりとか、なんか地域の安くて地域の物を食べる憩いの場所みたいなね。そういうのと連動させればいいというのは、それは分かっているのだけど実態はそうになってないのは多くて次々、辞めちゃっている、その実態をちょっと、どうしたらいいのかなっていうのを考えていかないと、ここもちょっと、本当に唯一残っているくらいに見えるのですよ。私には。だから少し、なんとかアドバイスしてあげてください。本当に。</p>
山下委員：	<p>ミュージアムとかは結構、景色がやっぱりいいところもあるんですけど。で後は何ですかね、結構、若い人が入札に応じてきて。</p>
岡村会長：	<p>ここはあれだよ、整備したら、なんか整備する場所で食べたりするとか。冗談だよこれ、冗談なのだけど、何かコラボしながら、色々なそういうの。昨日、東大の学食に行ってみたのだけど、ほとんどインバウンドと散歩の人。それから学生外の人、で三品取って食べて750円だったかな。ものすごく賑わっていて学生はほとんど居ない。授業中かもう休みになっているのかもしれないけど、なんかそういう今と違った仕掛けがなんか無いのですかね。実態として、その何度も言ってきたようにですけど、みんな頑張ってるのだけど、みんなぼしゃっていつているじゃないですか。その実態は本当にそう捉えていいのですか。そこがまず聞きたい。</p>
山下委員：	<p>みんなというのはどこですか。</p>
岡村会長：	<p>いや、どことは言わないよ、多くは。始めたことで今はやってないところって結構あるのじゃないって話。そんなことはないですか。</p> <p>私の知っているところでもやらなくなったとかいっぱいありますから、それをいちいちどこってあげてくれって言われると困りますけど、そういうマーケティングみたいなものをしっかり考えていかないと。</p>
山下委員：	<p>そうですね。はい。</p>
岡村会長：	<p>いや、すいません。余計なこと言いましたけどぜひプロとして適切なアドバイスをお願いします。</p>
石川委員：	<p>石川です。よろしいですか。来年度の事業計画の中に、特にホームページのリニューアルとかそういうのが見当たらないのですけれども、前回の運営協議会の時に、やはりホームページのアクセスというのは、結構大きいのかなと、今見ると、たぶん台湾からのいわゆる観光客が種差海岸とかそういうところに多く訪れて、ただやはりアジア関係の人は自然関係とか生き物ですかね、そういうものに興味はあるのだけれど、歴史的なものになかなか足を運ばないというようなところの中、言葉のバリアみたいなものがあるのかなと思うのですけど、もし来年度予算がなければ、再来年度に向けても、ホームページを何かリニューアルして、英語の他に台湾の人たち</p>

	<p>が見られるような言語対応とか、ここに来るとどういう体験ができるのかという、土器作りであったりとか、そういったものを動画で YouTube にリンクするとか、そういう動的な PR みたいなものを何かしたほうがいいのかというのは思いました。</p> <p>それこそ僕も、以前7、8年前に八戸に行った時に、7、8年前じゃなくて10年経つのですかね。八戸テレビとタイアップして、発見縄文館でしたっけ。市川さんとか小久保さんが10回、20回くらいに分けて、色々撮影して、ああいったものが、本当はホームページとリンクして、ああいう動画が見られるといいのになという、そういうのが過去というのが見られないのが残念だなと思いました。一応、YouTubeには若干残っているのが見られるのですが、ホームページを充実されて、ここに来るとこんなことができるよとか、先ほどのミュージアムショップとか、こういうご飯が食べられるよという画像、動画みたいなものがあるといいのかなというのを思いました。これだと感想なのですが、来年度、ホームページのリニューアルのそういう予算はついているのでしょうか。</p>
事務局：	ホームページのリニューアルは、次年度は計画しておりませんので、今後の課題として貴重なご意見ありがとうございます。なお、動画につきましては八戸テレビ放送さんで作成したもので、BGMがついた状態で動画をいただいたので、YouTubeに公開できないものもたくさんありまして、そういった関係で見られないものも生じているような状況です。
石川委員：	そういうことなのですね、著作権とかそういう音楽の関係の問題があるということですね。
事務局：	おっしゃる通りです。
石川委員：	はい。どうもありがとうございました。

(2)その他

岡村会長：	<p>皆さん、よろしいですか。ちょっと私は歳を取って、思いが募っちゃって、いろいろ厳しく聞こえちゃったかもしれない。とにかく期待感が厳しいことになってはいるのだと思いますので、是非よろしくお願いします。</p> <p>学校教育に対して気になってしょうがないですよ。隣の学区に行って、どんなふうに授業が行われているとか、管理運営委員というようになったのですが、文科省で一応置けることになっているみたい。必置ではないみたいなのだけど、言っているみたいですね。八戸市はどうですか。</p>
出貝委員：	八戸市は地域密着型ということで、コミュニティスクールとしてはこの4月から正式に組み、立て込み、そこに従事したかたちになるのですが、一応地域の方を委員として。
岡村会長：	館長さん、就任して丸1年ですね、何か言いたいことはありませんか。
中村館長：	最後にお礼もかねて一言発言をさせていただきます。ありがとうございます。

	<p>した。まず本日の会議に様々なご意見を頂きまして、ありがとうございます。どれもこれも、皆さんの思いをいただいて、我々も考えているところは皆様と一緒にございまして、そのなかの一つで、まず昨年アンケートがございました。八戸市内の公共施設に関する利用促進のためのアンケートで、その中で満足度というのがありまして、是川縄文館の78%の方々から満足をしているという評価をいただいたのですが、一方でその中で縄文館に来たことがあるという方が50%に少し足りないくらいでありまして、まず館としては、八戸市の世界の宝であります是川を紹介している館もありますので、まずは市民の誇りになるべく、多くの市民の方にここに来ていただいて、感じていただいて、市民の誇りとして考えてもらいたいなというのが一つでございます。</p> <p>それと合わせて、先程来お話があった観光客の方、インバウンドの方、世界にも発信していかなければならないとそういった中で、YouTubeとかSNSとかそういったものを使って頑張っていきたいと思っています。</p> <p>あとは小学校についても、働き方改革でなかなかこちらに来られなくなるかもしれないというご発言もありました。でも我々といたしましても、まず縄文館は市の施設でございまして、市民のためにある施設でございまして、もちろんお時間を作って頂ければ、我々のほうから出向いて、そういった機会を作っていきたいと思えます。お時間も含めて、ご相談させていただいて、やっていきたいと思えます。</p> <p>引き続き、職員一同、スタッフ一同、頑張っていきますので、引き続きご提言、ご助言等頂ければと思えます。ありがとうございました。</p>
事務局：	<p>長時間に渡り、本日もありがとうございました。本年度2回の会議がこれで終了となります。どうもありがとうございました。</p>